

九州大学石炭研究資料センター新収資料紹介(I) : 『森本文庫』

荻野, 喜弘
九州大学石炭研究資料センター

和田, 一夫
南山大学経営学部

<https://doi.org/10.15017/13723>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 12, pp.220-223, 1983-06-30. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン :
権利関係 :



九州大学石炭研究資料センター新収資料紹介 (1)

『森本文庫』

内容目録と森本光太郎氏について

このたび森本龍夫氏（東京都）より、『北部イングランド鉱山技師協会紀要』をはじめとする多数の雑誌が九州大学石炭研究資料センターに寄贈された。その内容はつぎのとおりである。

目録

Transactions of the North of England Institute of Mining Engineers. Vol. 1(1852-1853) - Vol. 18(1866-1869)	一四冊
Transactions of the North of England Institute of Mining and Mechanical Engineers. Vol. 19(1869-1870) - Vol. 38(1868-1869)	二〇冊
Transactions of the Federated Institution of Mining Engineers. Vol. 1(1889-1890) - Vol. 14(1897-1898)	一四冊
Transactions of the Institution of Mining Engineers. Vol. 15(1897-1898) - Vol. 51(1915-1916)	三八冊
Indices to Names of Authors and Subjects. Vols. 31 to 40.	三八冊
Transactions of the American Institute of Mining and Metallurgical Engineers. Vol. 62(1920) - Vol. 74(1927)	二三冊

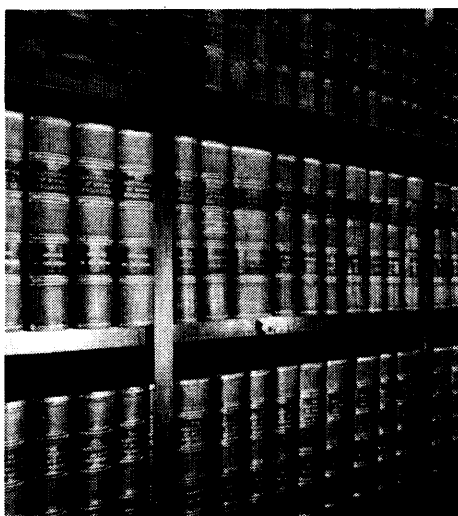
Cours D'Exploitation des Mines.

Tome Premier. Second. Troisième et Dernier. (1905-1911) 五冊

Cours D'Exploitation des Mines. Atlas.

Tome Premier. Deuxième. Troisième. (1874-1876) 三冊

合計一一冊



森本文庫

これらの雑誌は森本氏の尊父故森本光太郎氏の蒐集にかかっているものである。光太郎氏は、履歴書からもうかがえるように、三井鉱山で長い間技師として石炭鉱業に従事された方であり、石炭鉱業史に対する深い関心から鉱山技師協会紀要の蒐集にむかわれたものと思われる。このような関心は、三池鉱業所在勤時に官営期の三池炭鉱の記録である「三池鉱山年報」を書き写し、「三池鉱山に関する記録自明治六年三月」（上・下二冊）として残されていることにもあらわれている。（三池鉱山年報については『福岡県史 近代史料編 三池鉱山年報』昭和五十七年刊、を参照されたい。）ともに石炭鉱業史研究に対する

貴重な貢献であるといえよう。

鉱山技師協会紀要は和田一夫氏の紹介にみられるように、きわめて貴重な研究資料であり、九州大学石炭研究資料センターではこれら紀要を『森本文庫』と命名して、学内外の研究者の研究の便に供することになった。ご寄贈下さった森本龍夫氏に感謝するとともに、森本光太郎氏の写真と履歴書を掲げて、故人に対する謝意としたい。



故 森本光太郎氏

履歴書

原籍 福岡県若松市本町二一八五

住所 東京都目黒区東ヶ丘二一三三一

森本 光太郎

明治十六年十一月二十五日生

学歴

明治四十一年 七月 京都帝国大学理工科大学採鉱冶金学科卒業

職歴

明治四十一年 八月 三井鉱山会社入社、田川炭鉱勤務

大正 十年 八月 滞在一ヶ年の予定を以て欧米へ留学

〃 十二年 六月 三池鉱業所鉱務技師

〃 十三年 十月 全所宮浦坑主任心得

〃 十五年 八月 本店鉱務一部採鉱技士

昭和

二年 二月

罷役（朝鮮無烟炭鉱、常務取締役）

〃 三年十二月

復職、本店鉱務一部採鉱技士

〃 十年 二月

本店鉱務一部主事

〃 十年 六月

山東鉱業取締役（全十一年九月辞任）

〃 十一年 四月

日本鉱業会理事（全十二年三月辞任）

〃 〃 五月

砂川鉱業所長

〃 〃 八月

北海道鉱山学会評議員

〃 〃 十月

日本鉱山協会札幌地方常務委員

〃 十二年 七月

北海道産業衛生協会評議員

〃 十三年 七月

本店鉱務第一部長

〃 〃 十二月

国民職能登録に関する専門委員

〃 十四年十二月

三井鉱山会社取締役

〃 十五年 一月

社団法人日本鉱山協会理事

〃 〃 三月

南洋アルミ鉱業会社取締役

〃 〃 五月

鉱山懇話会三井鉱山代表委員

〃 〃 六月

三成鉱業監査役

〃 〃 〃

松島炭鉱取締役

〃 十六年 二月

三井総元方企画部委員会委員

〃 〃 〃

鉱工業総力発揮委員会委員

〃 〃 〃

東亜経済懇話会鉱工業委員会委員

〃 〃 一月

日本亜鉛鉱業取締役

〃 〃 三月

科学動員協会鉱業部門功労者審査委員

〃 〃 六月

日本鉱業会評議員

〃 〃 十二月

基隆炭鉱取締役会長

〃 〃 〃

釜石鉱山取締役

〃 十七年 一月

東洋軽金属会社工場建設委員会委員

〃 〃 〃

産業委員会分科会委員

昭和十七年	一月	日本鉱山学会学術部小委員会委員
〃	〃	日本学術振興会学術部第四九小委員会委員
〃	三月	鉱山統制会技術専門委員会委員
〃	四月	商工省産業設備評議委員会専門委員
〃	七月	南洋アルミニウム鉱山建設委員解任
〃	九月	東亜経済懇話会大東亜経済委員会鉱工業分科 会委員
〃	十二月	北海道炭鉱会社監査役
〃	〃	釜石鉱山取締役解任
〃	十八年	基隆炭鉱取締役会長解任
〃	十二月	本店技術部長、保安部長
〃	十九年	太平洋炭礦取締役
〃	二十年	常務取締役
〃	〃	九州駐在
〃	〃	太平洋炭礦常務取締役
〃	四月	南洋アルミニウム鉱業取締役解任
〃	六月	九州地方三井本社代表就任
〃	九月	松島炭鉱常務取締役社長代行
〃	二十一年	松島炭鉱取締役社長
〃	五月	北海道炭礦汽船取締役解任
〃	〃	太平洋炭礦取締役社長
〃	六月	松島炭鉱取締役社長解任
〃	二十三年	太平洋炭礦取締役社長解任
〃	二月	死去
〃	三十一年	二月

(荻野喜弘)

「鉱山技師協会紀要」について

— その社会的地位の変化との関連で —

イギリス本国における石炭産業史研究は現在、研究史上の一つの大きな画期をむかえようとしている。それは、イギリスの全国石炭庁 (National Coal Board) の全面的な支援の下にすめられていた「正史」(Official History) の手にできる日が間近いからである。この作業の一端は既に公開された文献目録 (*Bibliography of the British Coal Industry*, compiled by John Benson, Robert G. Nevill, and Charles H. Thompson (Oxford University Press, 1981)) によって窺うことができるが、少なくともこの「正史」がおびやりなものではないと予期させるに十分であろう。ところで、この文献目録にも重要な原資料の所在場所として記載されている「北部イングランド鉱山・機械技師協会」(The North of England Institute of Mining and Mechanical Engineers) の『紀要』(*Transactions*) が、この度、九州大学石炭研究資料センターに森本文庫として収められた資料である。この「協会」と「紀要」について簡単な紹介をし、寄贈された森本龍夫氏の御厚意に対する感謝の一文としたい。

「北部イングランド鉱山・機械技師協会」は鉱山事故防止および鉱山科学の進展をはかるために、鉱山技師の集まりとして、一八五二年に発足した「協会」である。(もっとも、当初は「北東部イングランド鉱山技師協会」として出発し、鉱山の技術的問題の関連から、一八六〇年代末には加入対象を拡げ前記のごとく名称も「鉱山・機械技師協会」と変更している。) この「協会」が設立された北部イングランド地域はイギリス有数の石炭産出地域であり、十九世紀初頭には多数の大炭鉱が稼動していた地域であった。古くから石炭の採掘がおこなわ

れていた関係で、他地域と較べ採炭現場はより深いところにあり、操業規模も大きかった。したがって、爆発事故の発生が炭鉱所有者にとっては巨額の損失を意味しただけでなく、綿密な採炭方法・計画を練り、操業をしなければ、多くの石炭を地中に残し、結果的に炭鉱所有者の損失をまねくことは、既に当時においても的確に認識されていた。このことは、専門職として鉱山技師がその重要性を認められることでもあった。事実、この「協会」設立の意図は、専門職として認められつつあった鉱山技師の地位を社会的に認知させ、その社会的地位を確固とし、上昇させようとするものであった。

この北部イングランドに続いて他の炭田地帯でも、このような鉱山技師を中心とした「協会」が設立されたが、やはりこの北部イングランドのこの「協会」が技術面でも、会員数やその他の面でも、他の協회를圧していたようである。そして、この「協会」の中から他の地域との統合を企図する動き、ないしは何らかの連合組織を設置しようとする動きがでてきた。はやくも一八五四年には各々の炭田地帯の代表者がロンドンで会合をもち、様々な地域の鉱山技師の情報交換をはかる機関の設置を討議したが、失敗に帰した。一八六八年十一月にはこの「協会」の会長であったジョージ・エリオット卿が、各地の鉱山技師協회를統合する必要性を訴えた。各地の協会が独自性を保持したままでも、全国的な連合組織が形成されさえすれば、鉱山技師の社会的地位はきわめて高いものになると彼は力説したのであった。しかし、この彼の考えもこの時点では実現されなかった。その後も、「協会」の歴代の会長は連合組織の必要性を訴えたが実現せず、一八八八年になり、やはり「協会」主導の下にロンドンで会合をひらき、一八八九年一月のシェフィールドの会議で連合体設置を原則的に承認し、一八八九年七月一日に念願の全国組織「鉱山技師連合協会」(Federal Institute of Mining Engineers)が正式に発足したのだった。

(この組織は一八九〇年代末に「鉱山技師協会」と名称が変更され、より強固な全国組織となった。)

森本文庫として石炭研究資料センターに収められた資料は、「北部イングランド鉱山技師協会」、「北部イングランド鉱山・機械技師協会」、そして「鉱山技師連合協会」、「鉱山技師協会」と名称を変更しながら、その度に確実に専門職としての社会的地位の上昇をかちとっていた技術者集団の軌跡をたどりうる稀有な資料であり、この一連の協会の『紀要』が欠本もなく揃っているのは、わが国で極めて珍しいと思われる。

この『紀要』の内容が、彼らの社会的地位の変化に符号するかのようには、微妙に変容していった事実もまた注目に値しよう。「協会」が設立した当初は、技術者集団の『紀要』らしく、その内容のほとんどが「通気」、「鉱山爆発」や「地質」などの技術的問題の解決に論文が集中している。ところが十九世紀末に近づき、彼らの社会的地位が上昇し、安定するにしたがい、このような技術的問題に関連する論文の他に、視察旅行、工場見学などの記事が増え、中にはきわめて詳細な紹介がおこなわれる場合さえも散見されるようになっていく。したがって、この『紀要』が技術史の研究にきわめて有益なものであることは言うまでもないが、特に十九世紀末以降には個別企業の生産設備の状態について極めて詳細なデータが掲載されている場合があるので、ときとして経済史・経営史の研究者にとってきわめて有益な情報をもたらすように、筆者には思われた。

この『紀要』が九州大学石炭研究資料センターに寄贈されたことを心から喜ぶと同時に、研究者にこの資料の有用性に注意を喚起したい。

(和田 一夫)